

第二十五話

天 白 地 蔵

板山の集会所の前で、おばあさんたちの大きな声が聞こえてきました。

「わしゃあ、耳が遠くなつてしもうてのう、家の嫁がわしの悪口を言つとつても、ちつとも聞こえんで、くやしくてしょうがないがえ。」
「あんたのこのお嫁さはええ人で、おまはんの悪口など言わしゃる人じゃないわえ。たとえ言われたとしても、耳が聞こえにや、かえつていいじゃないかえ……。」

「おまはんはよう聞こえるだから、そんなこと言つとるだが、わしの身にもなつてみなはれ。」
「わしものう、耳が遠なつたことがあつたけど、天白地藏さんにお参りさしてもらつたら、

よう聞こえるようになった。おまはんも、柄杓の底に穴をあけたのを持つて、安楽寺へ行つてお参りしたがええがの。」

おばあさんは大喜びで、早速新しい柄杓に穴をあけたのを一本と、大きな巾着きんちやくにお供への米を詰めて、安楽寺へ行きました。

和尚さんが地藏堂の扉ひらを開けて、お祈りをし、

「さあ、その柄杓でよく耳をなでて、お地藏様の前に置きなされ。きつとお地藏様かなえてくださるからな。一週間、毎日お参りに来なさるがいい。」

おばあさんは、毎日新しい柄杓を持つて、七日間お参りしました。七日目に耳をなでると、柄杓の穴からスーッと風が入つてきたような気がしました。そしてそれからは、昔のように耳がよく聞こえるようになりました。

明治・大正のころまでは、耳の遠い人が、三河や四日市の方からもお参りに来て、穴の

あいた柄杓がたくさん供えられていたということ
です。

地藏さんのいわれ

この天白地藏さんは、最初、福山川ひくやまがわの上流



にある地藏池という池の堤つみの上に雨ざらしで
立っておられました。

ある年、大雨が降り、地藏池の水があふれ
て福山川へ流れこみ、川の堤防が切れました。
「オーイ、また天白のところが切れたぞー」
村人たちは、手に手に鍬くわや備中びちゆうを持って集
まってきました。

「オヤ？ こんなところにお地藏様が！ こ
れは地藏池のお地藏さんじゃないか。雨で流
されなすつたのに違いない。もとのところへ
お返し申そう。」

と言って、みんなで地藏池の堤へ安置しまし
た。

次の年もまた大雨が降り、昨年と同じ天白
の堤が切れました。村人が出ると、またお地
蔵様が泥にまみれて、切れた堤の下に横に
なっておられました。

「オーもったいない。」
と言って、きれいにお洗いしてもとの場所へ

安置しました。お地藏様は、にっこり笑っているかのようでした。

ところがある日、村の悪童たちがそこへ遊びに来て、このお地藏様を抱き上げて、ずつと下流の福住の方まで持って行ってしまいました。村人たちは、「お地藏様が消えてしまわれた」と大騒ぎをしましたが、次の朝には、ちゃんと天白の堤に立っておられました。

「オー、このお地藏様は天白がお好きとみえる。いっそ、ここへお祀りしよう。」

と言って、川の堤に小さいお堂を造ってお祀りしました。

それからというもの、福山川の堤防も切れなくなり、だれ言うことなく「天白地藏」と呼ばれ、お祈りをすると耳が聞こえるようになるという噂が広がりました。

なお、この天白の地には、以前から天白明神という神様が祀られており、こちらの方は、歯の痛いのが治ると言われていました。

その後何年かたって、明治6年神仏分離と河川改修のため、地藏様は安楽寺へ、明神様は県神社にお移しし、今もなお、人々から敬われています。

社寺の靈驗



医学が現代のように発達していなかった時代には、宗教が医療にかかわる度合いが高かった。特にわれわれの祖先は、

すべてのものに靈力を認め、人間への影響力やたたりを畏怖する心情が強かったので、天神信仰などが全国に流布されたり、伝来した仏教も、その宗教哲理の実践よりも、薬師・不動仏信仰や祖靈鎮魂が歓迎された。したがって、社寺草創の伝記にはこうした傾向のものが多く、本話もその一例である。

天白地藏尊の祀られる板山の安楽寺は、曹洞宗に属し、文禄2年洞雲院二世久山昌察大和尚を開山として創建され、地藏堂は大正13年再建。なお、本堂・庫裏等は今年秋再建されている。

江戸時代の戸数・人口の増加

寛文村々覚え書き（二六七一年刊、○印を付す）
と尾張徇行記（一八三二年刊、△印を付す）で、
約五十年前の当町内各部落の戸数・人口を比較
してみると、次のとおりである。

白沢 ○41戸242人 △104戸416人 草木 ○68戸538人
△192戸853人 坂部 ○32戸208人 △77戸336人
卯之山 ○63戸417人 △135戸622人 稗之宮 ○45戸302人
△103戸468人 椋原 ○15戸98人 △25戸

120人 矢口 ○42戸213人 △68戸302人 高岡 ○31戸182人
△75戸293人 角岡 ○25戸149人 △39戸155人
大古根 ○64戸369人 △109戸444人 植○72戸399人
△144戸593人 横松 ○35戸177人 △80戸369人
萩 ○27戸207人 △60戸246人 宮津○70戸532人
△172戸745人 福住 ○39戸232人 △99戸433人
板山 ○37戸210人 △112戸494人 合計○706戸4475人
(二戸6.3人) △1594戸6889人(二戸4.3人)

第二十六話

みよし様

大昔、宮津は知多の海が深く入り込んだ浜辺の村でした。

村人たちは、穏やかな浜辺へ出て、男は小魚を捕え、女・子供は貝や藻もを拾っておりま

した。それら豊かな獲物が毎日の食卓をにぎやかにしてくれるからです。

「おいおい、あれはなんだろうな……。」

一人の男が、汀みなぎを指さしました。

岸辺へは、ときどきいろいろなものが流れ着きました。多くは、流木だったり海藻だったりして、みな、人々の日々の暮らしに役立ってきました。だから人々は、なんとなくそんな気持ちでその方向へ目をやりました。

ところがその流れ物は、実になんとも奇妙なものでした。

も触れようものなら、どんなあたりがあるか
しれない。……女・子供の中には、あとずさりして、引き上げてある

それは、川や沼のほとりに生えている葦もが三束ほど筏いかだのように組まれて、その中央には、御幣ごへいが一本の葦を背負って、まるで帆のように立てられています。

小舟の陰から、おそるおそる目を光らせている者もいました。

葦の中には、金紙の帯をしたお札らしきものも包み込まれているようです。

まもなく、知らせを受けた村長むらおぢの老人があたふたとやって来ました。そして、その漂流物を一見するや、砂浜へペタリと座って、うやうやしく柏かしわ手を打ち、何度も深々と拝礼を始めたので、取り

村人たちは、みんなを呼び集めて、額ぬかを寄せ合い、あれはなんだろうと首をひねりましたが、だれにも分かりません。と



ます目をパチクリさせました。

にかく、人の手で作られた神様と関係があり
そんなもの、そうだとすれば、うっかり手で

「ああ、これこれ、皆の衆。何をそこでぼんやりと立っておるのじゃ。」

もつたいたなくも御葭天王様のお着きじゃ。粗相があつてはなりませぬぞ。早う拝みなされ。」

何が何だか分からないまま、ひえつと人々はその場へひれ伏しました。

「これはな、津島の牛頭天王様のご神体じゃ。あのお社では、毎年6月16日にご神体の葦を取り替えて、去年のものは川へお流しになる。これを『みよし様』と申し上げるのじゃが、『みよし様』が流れ着かれた所では、岸辺に笹竹を立ててお祀りをし、ご神体を鎮守へお移しせねばならぬ。」

……それにしても、この浦深く『みよし様』がご入来とは、わしはまだ一度も聞いたことがない。これは、今年の豊年満作疑いなしということに違いない……。

「何にしても、忙しいことになってきたぞよ。さあ、皆の衆。村中へ触れて、お祭りの支度じゃ、支度じゃ……。」

さあ、大変です。村中がひっくり返るような大騒ぎになってしまいました。

——さて、この「みよし様」が流れ着かれた所を、今では「名師」と呼ぶのだそうです。

神葭信仰



— 卯之山・津島神社 —

阿久比谷の始祖と言われる英比磨が、ツ葉の葦原上を群舞する白鷺に吉兆を感じて、白沢と名づけた地に天神を祀ったという伝説に見られるように、葦を神聖なものや神体としてあがる信仰習俗は、津島神社をはじめとして、全国各地に多く、昔は熱田神宮にもあった。本話は、それにちなむ地名伝承で、こうした例は、県内の各地に多く残っている。

当町には、承安3年勸請と社記で伝える卯之山の津島神社をはじめ、白沢・草木・植大に境内社として津島社があり、板山の熊野神社には御芳社も存し、禊と祓をもって悪疫を払おうとする信仰が盛んである。

第二十七話

神様ぞら豆嫌い

「おおい、伝六よ。いい若いもんがいつまで寝とるんか。お天道様が真上へ来とるといふに……。」

隣の甚兵衛さは、雨戸をドンドンとたたいても返事がないので、勝手知った気安さで、ガタビシ板戸を引き開けて中に入り込みます。どこの家もそうですが、特にこの家の中は、土間に農具やら、織りかけの夜業の薦にわら束などが散らかって、足の踏み場もありません。一間きりしかない、むっとするような板の間には、せんべい布団をすっぽりと引きかぶって一人の男が寝ています。

「……それにしても、独り者にはうじが湧く

というが、なんとまあ、このざまは目も当てられねえ。しかも、この陽気に布団を頭からかぶって寝たりして、体が腐つちまうじゃねえか……。」

ぶつぶつ言いながら、枕もとにあぐらをかくと、垢のついた布団の端を乱暴にめくりまわす。

「ああ、甚兵衛さか……。」

オコリ病い

「なさけねえ声出して、いったい、どうしたのたえ。」

「ああ、夕べのう、薦を編んどつたら、急に寒けがしてきて、そのまんま寝ちまったのだが、夜中に体中がガタガタ震えてきて、苦しうて一晩中うなつとつた。朝方になってやつとおさまってきたが、起きようと思ってもフラフラしてどうにもならん。今日は野良へは出られそうもない……。」

「そりゃあ、えらい目にあつたのう。以前、いとこの太助がなつたことがあるが、家のじ

いさまが言うには、オコリという病いで、一度かかると何度もあるそうだ……。さてはおまえも、権現様の朱鳥居をくぐったな。」
「うん、一昨日行つたが、それでオコリにかかるなんて、ばかな……。」

「ばかなという言いぐさがあるかえ、このバチ当たりめが。」

あのお社の神様はな、もつたいなくも、お伊勢様や津島様の御父上に当たられる熊野権現様だぞ。そもそもこのお社が建てられたわけという、京都で室町將軍足利義満公が金閣寺をお建てになったころのことだが、済乗院のご住職様が、仏様へのお経が済んで、お部屋でいっぶくしておられるうちに、お疲れが出たのか、つい、うとうととされた……。」
なにしろ、仲矢口でも物知りと自認する甚兵衛さんのことですから、お社の履歴を縦板に水を流すように話し始めました。

——胸までたれた真つ白なひげの老翁が現

われて、わしは熊野の神である。末永くこの矢口の里と寺を守ってやろうと言われた。目がさめたご住職は、早速ここへ祠をお祀りされたのが、このお社の初まりだ。ところが、



元禄のころ、尾張の国のお殿様光友公がご領内を巡視中、その祠の前で休憩をなさったが、あたりを見回されると、時ならぬ松茸がびつしり生えている。ああ、ここは神の思し召し

にかなった地に違いないから、立派なお宮をお建てするように、鳥居は赤いのがよいと仰せられて、お手もと金をたくさんお下しくだにされた。――

「そういう、ありがたあいお社の、しかもお殿様が寄付なされた赤い鳥居を、わしら下々の者が大威張りでくぐれば、ばちが当たるのはあたりまえのことた……。」

火事騒ぎ

さて、伝六さのオコリ病いは大したことなくて済んだのですが、それからしばらくして今度は火が出て村中は大騒ぎ。それでも、みんなが駆けつけてくれて、丸焼けだけはまぬがれ、数少ない家具・衣類はほとんど運び出すことができましたが、伝六さは、うち続く災難にガツクリしてしまいました。

彼に付き添ってお詫びの参拝をしてやったのですから、さすがの甚兵衛さも、今度は鳥居は持ち出せません。そこで、占いばあさん

に伺ってもらおうとすすめます。

しかし、その結果は、なんと、神様はそら豆がお嫌いだと言うのです。どうしてなのかその理由は分かりませんが、神様の好かぬそら豆を伝六が作ったので、神様がお怒りになつているといふご託宣たくせんでした。そう言えば、実は伝六さは、珍しいからと隣村の親類からそら豆の種をもらつてきて畑へまき、みんなに自慢していたのです。

とにかく、お徳の高い神様がおっしゃることです。人々の願いをよくかなえてくださるかわりに、罰もすっかりお与えになるというわけで、伝六さは早速、畑のそら豆の苗を一本残らず引っこ抜いてしまいました。

さて、それからというものは、この地区の人々は、赤い鳥居はくぐらないで別の道を通るようにし、また、畑でそら豆を作ることだけはご遠慮しようということになったといひます。

禁忌



— 箭比神社 —

特定の家やその同族・部落で、特定の行為をしたり、作物を栽培したり、食べたりすることを忌み、その禁をおかすとたたりがあるとする民間信仰を禁忌と言い、各地どこにもあり、またその理由を示す伝説が多い。

この地区で今もそら豆を作らない信仰は、作物禁忌の中に入るが、なぜ神がそら豆を嫌うのか、その理由ははっきりしないが、各地にある栽培禁忌を比較検討してみると、外来植物に係るものが多く、本話もその一つと考えてよいであろう。

また、こうした禁忌は、おそらく、他の家や地区と区別をして、その共同体の結束を固めようとする意図によって作られたものではなからうかと考えられる。

なお、本話に登場する権現様とは矢口の箭比神社のことで、当社は初め地藏山にあったが、元禄7年現在地に移転したと伝えられている。

第二十八話

徳住上人

文化14（二八一七）年の夏のことでした。

かっと照りつける太陽の光も、さすがに広く軒深い雲谷寺の本堂の中へは及ばず、ぎつしりと詰めかけた参詣者の群れの上を、涼しい風がかすかに吹き通っておりまして。

本堂の中には、長い法要の後の、よい香のかおりと、人々のざわめきが漂っていました。が、仏壇のお燈明を背に一人の僧が着座すると、一座はたちまち水を打ったように静かになっていきました。

「これはこれは、皆の衆。この暑い中をようこそお参りなされました。さすがにご信心深い阿久比谷の皆の衆、このように大勢お集ま

りくだされ、こんなうれいことはありませぬ……。」

説教僧は、年のころは四十を越したばかりでしょうか、長い苦行に鋼がねのようにやせた体で、静かに、それでも隅々までよく通る声で



語りかけます。

「さて、皆の衆。拙僧せつそうは徳住とくじゆうと申しますが、このお寺や隣の観音寺かんのんじは、私にとつて、まことに因縁浅からぬ大切なお寺でござる。」

人々の不思議な顔を見渡しながら、徳住上人は言葉を続けます。

「実を申せば、私はこのお寺で坊さんにしていただいた。今からもうかれこれ三十数年も前のこととござつたが、三河みかわ・大浜おおはまの父親のたつての願いに従い、この雲谷寺で剃髪ていはつし、観音寺には四〜五年ほどおいていただいた、あの小坊主でござる……。」

人々の中から、ああ、それでは、とうなずく声があちこちであがりました。

「私は、ここで、真誉上人様しんよ・千誉上人様せんよのおかげで、最初の仏道修行をさせていただいた。十五歳のとき江戸の増上寺ぞうじょうじへ上がり、それから、各地の寺々で修行をさせていただいているうちに、師匠の徳本上人様とくほんのお導きで

どうか皆の衆にお話を聞いていただける身となり申した。このたび、岡崎の殿様から、大樹寺で説教をせよとお招きを受けたについて、ぜひとも初めて出家した地でお話をさせていだきたくて、こうして参りましたのでござる……。」

人々は、今天下にその名も高く、生き仏の再来と仰がれる上人の意外な話にびっくりもし、また格別の親しみを感じて仰ぎ見るのでした。徳住上人は満座の人々に、人間の宿業の深さと念仏のありがたさをじゅんじゅんと説き聞かせます。そして、師の徳本上人にならつて、年中一枚の着物で過し、決して横になつて寝ることなく、毎日十万遍のお念仏を唱えて在俗の人々の往生救済を祈っていると語り告げるに及んで、集まった人々は、そのありがたさに涙にむせび、いつのまにか手を合わせて念仏を唱和するのです。

——この後、徳住上人が再びこの地を訪れ

ることはありませんでしたが、人々はその説教のありがたさが忘れられず、浄財を出し合つて、雲谷寺や観音寺などに六字の名号塔を建て、長くその徳をたたえたということです。

名号塔



— 観音寺 —
徳住上人は、安永6年三河碧海郡大浜村（現碧南市）に生まれ、幼名角谷豊次郎。寛政元年、父繁右衛門の希望で、当町雲谷寺で出家。寛

政5年江戸増上寺へ入寺、その後各地で血のにじむような学問と修行を続け、文化12年念仏聖者徳本上人の教化を受けて、生涯単衣不臥、口称十万遍の誓願を実行、多くの大名・庶民の帰依を受けた。天保13年名古屋光照院に没し、岡崎九品院に葬る。高岡観音寺の二世になつており、両寺等には徳本流名号塔が建立されている。



— 名号塔 —

第二十九話

黒 鋤 稼 ぎ

ここは、山深い奥三河の粗末な板ぶきの作業小屋の中です。

板壁の透き間からさし込んでくる月の光で、大勢の人々が土間にムシロを敷いて、重なるように寝ているのが見えました。枕もとには、大小二包みほどの荷物がそれぞれ置かれており、ほとんどはぐつすりと寝息を立てていましたが、まだボンボンと低い話し声をかわしている者もありました。

「のう、作次さくじさあ。いよいよ明日あしたは阿久比谷へ帰れるのう……。」

「うん、女房やガキに久しぶりに会えるなあ。帰り支度もできたし、なんとか喜ばせるだけ

米も給金ももらえたしのう……。」

「正月もそこに黒鋤くろくわに出てきただが、阿久比とは違って、こっちは雪も深く風も身を



切るぐらい冷たい。その中でのあの山畑を切り開く仕事は、今までになくつらかった。金かね兵衛親方も、こんな仕事を請け負ってしまっ

て、すまんこった、少しは割り増しがもらえ
るようかけ合ってみると言つとつたが、初め
のうちは、夕方になると、ものも言いつうな
いほどくたびれたもんだつた。こんなこと
だつたら、宮津の衆のように酒屋へ米つきに
行つた方がよかつたと思つたもんだ……。」

「おまえは初めてだから、こたえたのだらう
が、どこへ出稼つかせぎに行つても同じことだぜ。
人の仕事はよう見えるが、酒屋へ行くにはつ
なぎなぎがなけりゃああかんし、第一、給金あつちが安
い。仕事はつらいが、日に四食、粟飯あわめしでも麦
飯でも食わしてくれるところは、そうざらには
ないぜ……。」

「そりゃあ、そうかもしれない。おれもどうや
らこの仕事に慣れたのでう。とにかく、早う
帰つて田打ちをせんならん。もみまきの準備
もあるしのう……。」

「九兵衛くへえさあ。おまえ、さつきから黙つて考
えごとをしてるようだが、どうしたのだえ。

おまえはさつき金兵衛親方に、みんなより一
足遅れて帰ると言つとつたようだが……。」

「若いもんなら、三河にかわいい子ができた
からとも言えるが、おまえは女房・子持ちだ。
みんな飛んで帰るといふに、なんでそげなこなこ
とを言うのだえ。」

「……実はのう、みんなと違つて、わしは春
過ぎから帰つておらん。積もる借金に逃げる
ように家を出て、少しはまとまつた金がほし
いと正月も帰らずじまい。だが、春には宗門
改めがあることだから、どうしても帰らにや
あならねえ。夜になつてから庄屋様へご挨拶
をして、それから、かかかあに、子供の土産みやげと
給金と米を全部渡して、人に会わねえうちに
また引き返すつもりだ……。」

「おまえも気の毒になあ。としより二人が長
いわずらいで、薬代はかさむし、看病で働き
手が減るし、おまけに子沢山たくさんだ。お互いに水
呑百姓は、なんでもねえ時でも食うに精いつ

ばいだからのう。」

「黒鍬へ出て、一日中もつこをかついで、お天道さんが昇るときから沈むまで働き通しですよ、それで持って帰ったお銭が借金で右左じやあなさけねえが、これも仕方だねえことさ。」

江戸時代の村の暮らし

阿久比十六か村

当町内各地に村ができたのは相当の昔と考えられるが、最初は、稗（ひ）宮（みや）津（つ）福住（ふくぢゆう）卯の山（うのやま）植（うゑ）の五郷だという伝承がある。

一般に阿久比谷十六か村と呼ばれて、一つのかたまりとして扱われているが、村の名は次のとおりである。（ ）内は現在の大字名。

稗之宮（阿久比）、棕原・角岡（以上棕岡）、矢口・高岡（以上矢高）、植・大古根（以上植大）、横松、萩、宮津、福住、板山、白沢、草木、卯之山・坂部（以上卯坂）

なお、岩淵を入れて十七か村と言う場合もある。また、高岡村の西南に檉木田村というのが存在し、後に本村に合流したといわれている。

尾張藩蔵入地

戦国時代初期は、土豪や有力者が分割して領有

「まあ、明日は早立ちだから、もう寝ることにしようや……。」

厳しい山家の夜の気配にも、ようやく甘い春のいぶきが漂い始めておりました。

していたが、織田、豊臣と政権が移動するにつれて、当地の領主は目まぐるしく変わったが、徳川政権の確立と共に、尾張国へ徳川忠吉に次いで慶長12年同義直が封ぜられるに及び、以降約三百年、当町内の各村々は、御三家の一つ尾張藩の統治を受けることになった。

元禄時代まで、草木が藩の家臣清水甲斐守の所領となったり、他の村々も二人の代官の分割支配を受けたこともあったが、その後は、全部公領（蔵入地）として郡奉行、後鳴海代官の支配を受けることになった。

村のしくみ

村が行政上の単位となったのは、江戸時代であるが、武士と工・商（町人）は城下町に集められ、村の住民は農民ばかりであった。もちろん、生活の必要上、鍛冶職・建築・酒造・小商業などはあつ

たが、すべて農民の兼業であった。

村内では、庄屋・組頭・頭百姓（百姓代）が村方三役（村役人）として行政に当たったが、村役人には、本百姓（自作農）の実力者でなければならず、水呑百姓は、村の重要な会議に参加が許されなかった。

寺請け・宗門改め

江戸幕府は、政権崩壊につながるかねないキリスト教信仰を根絶しようという名目で、鎖国を断行し、寺請け制といって、農民を強制的にいずれかの寺院の檀家とし、出生・死亡・結婚から旅行・出稼ぎにいたるまで必ず届け出るよう義務づけ、毎年寺院・庄屋に宗門改めを実施報告させて、農民を村に釘づけにした。

なお、社寺は寺社奉行の管轄であった。

五人組制

また農民は、五世帯を一組として、相互援助や監視をし、共同責任をとらされた。組頭は、いくつかの組を支配した。

農民の苦しい生活

農民の年貢に財政源を頼っていた江戸時代の武士は、「慶安のお触れ書き」に見られるように、農民生活の細かい点にまで干渉し、自給自足の耐乏

生活を強いた。

年貢は五公五民といって、収穫の半分を納めさせたが、現在に比して収穫量が極めて少なく、畑作、河川・山林下刈りまで税をかけたので、農民の負担は大きく、特に水呑百姓は地主への納付分を取ると、残りはわずかで、常に貧困にあえぐことになった。

内職夜業に出稼ぎ

したがって農民は、農作業のほか内職として、男は薦織り・縄ない、女は襷織りに精を出し、雨天ばかりでなく、夜も夜なべ・仕事に励んで家計の助けとした。また農閑期には、黒鋳・石工・大工・左官・米つきなどに雇われ、為政者には歓迎されなかったが、他国へも出かけ、横松大工・萩左官・宮津酒六などと呼ばれたものである。

黒鋳稼ぎ

出稼ぎの中で最も多かったのは黒鋳で、文政年間の尾張廻行記には総勢三百五十人以上出ていると記録されている。黒鋳とは土木工事者で、親方に率いられ、十数人が一組となって、三河・美濃・伊勢、遠くは京・大阪・堺へも農閑期に出かけ、農家の家計の足しにされたものである。

第三十話

しんてつさ

なんでも今から百年ほども前のことだそうだが、棕原にどえらい大きなヤシキマワリがおつての、この大蛇が、また、性の悪いやつで、そこら中の飼ひ鶏の卵を飲んで回つて、みんなもう閉口しとつた。なにしろ、卵をいっぺんに五つも六つもぺろりと飲み込んでしまふほどでつかい体のうえに、蛇を殺すと七代たたるとみんな気味悪がつて、だあれも手を出さぬ。それで、そのヤシキマワリ、いい氣になつて、わがもの顔でそこら中をはい回つて、悪さばかり繰り返しとつた。

ところが、村のある男が、天白の「しんてつさ」に頼んで退治してもらたらどうやと言

い出した。

天白というのはな、今の丸山公園の南東のそこだそうだが、そこにみんなが「しんてつさ」と呼ぶこじき坊主が、草ぶきの小屋を建てて住んどつたんや。「しんてつさ」つていうのは、どげな字書くか、わしは知らんが、とにかく、その坊さん、いつもぼろぼろの衣を着て、托鉢だと言うて、時たま米やいもや味噌をもらいに村を回るだけで、あとはガタビシの板戸を締めて、何をしているか知らんが家の中でじいつとしておる。だあれも口をきいた者はあらせなんだ。

しかし、ひよつとすると、何かよい思案を持つているかもしれぬ、まああんまり当てにならぬが行つてみるかと、それでみんな、ぞろぞろとつながつてわら小屋へ出かけてみることにしたんだわ。

「しんてつさ」は、相変わらずぼろぼろの着物でのっそりと小屋から出てきて、あごをほ

りぼりかきながら無表情にみんなの話を聞き、それからポツンと「あした、わしが退治してやる。」と言うなり、また小屋の中へもぐりこんでしもうた。

あんなこと言って大丈夫かいのうとみんなで言い合いながら、またぞろぞろとつながつて帰ったのだが、驚くじゃあないか、その明るる日に「しんてつさ」が大蛇を食べちまったんだそうな。

いつものように、卵をしこたま飲んで、いごぎげんでのろのろと道端へはい出してきたヤシキマワリは、どうしたことか「しんてつさ」の顔を見ると、びたっとそこから動けなくなっちゃまったんだとよ。

「しんてつさ」は、なにやら口の中でブツブツと呪文じゆもんみたいなのをつぶやいたあとで、どっこいしよと、蛇の頭を片手で握って持ち上げ、大きくふくらんだ蛇の腹をしごくように二回、三回とさすり上げると、驚くじゃあ

ねえか、蛇の口から七つも八つも鶏の卵がコロコロと吐き出されてきた。遠巻きにし



てかたずを飲んで見守っていた村の衆の中には、地べたにへたへたと座り込むもんがおつ

たという。

「しんてつさ」は「わしの腹の中へ成仏しろ」と大声で言ったかと思うと、なに食わぬ顔で大蛇をかついで、すたすたと小屋の方へ戻って行ってしまったそうなの。

大蛇はどうなったかって……そんなこと、わしは見たわけじゃあないから、はっきりしたことは言えんが、おおかた焼くか煮るかして食つちまっただらうなあ。

とにかくそれからというものは、村のものは、今までこじき坊主とばかりにしていたくせに、あのお方はきつとお偉いお坊さまに違いない、あのようなお方にこんなあばら屋ではもつたないと言ひ合ひ、みんなで、その当時には珍しい瓦ぶきのお堂を建てて住んでもろたということだわさ。

だが、そのお堂とかいうもんは、わしが子供のころでも、もう建ってはおらんのだがのう。

第三十一話

大 峯 参 り

小高い丘から松林の間を縫って進む異様な一団の姿が、今日は三回も見られました。みな、そろいの白装束しろしょうぞくに白はち巻き姿で、その白さのせいにか、赤銅色の顔や手足にみなぎる若さが躍動しているように見られました。

ただ、その先頭を歩むのは、同じいでたちながら白髪の老人で、鶴のようにやせた体をぴいんと伸ばし、彫りの深い顔の目は鋭く光っております。

突然、その老先達せんだつが、歩きながら、よく響く声で叫びます。

「サンゲ、サンゲ、六根清浄ろっこんじやうじやう。」
するとすぐさま、一列で後に続く若者たちの

声が、あたりの山や谷にこだまします。

「サンゲ、サンゲ、六根清浄。」

老人が再び声を高めます。

「お山は八大金剛道場。」

若者たちの一団は、両手の指をしつかりと胸もとで組んで、その後につながります。

「お山は八大金剛道場……。」

老人が吹きならすホラ貝の音が、ブオー・ブオーとあたりを震わせました。

この一団は、幾度も叫びを繰り返しながら行進を続けます。そして、谷のため池のほとりに着くと、老先達はその歩みを止めました。初夏の池の水は、周りの木立の影を汀に映しながら、冷んやりと澄みきっております。

先達の老人は、若者たちが横一列に並ぶのを見ますと、やおら池を背に中央へ進み出て、ほとばしるような声で呪文を唱え、いくつかの印を結び、力強く腕を振るって九字を切ると、さっと自分の背にさした御幣を抜き

取り、体をこわばらせて立ち並ぶ若者たちの上にさっさつと幾度も打ち振ります。

そして、再び御幣を背首にさすと、くるり



と向きを変えて、ずぶずぶと池の中へ入っていきます。若者たちも、いっせいにその後へ続きます。

胸まで水につかった人々が一心に唱えるサングエ、サングエ……の大合唱で、池の水は細かい波を立てておりました。

それから十日ほど後のことでしょうか。板山の街道で行き合った老人たちが、声高にしゃべり合っていました。

「のう、大峯参りの若い衆たちは、もうどの辺まで行ったことかのう。」

「そうさなあ、もうかれこれ洞辻にかかっているころか。」

「一週間もおこもりやみそぎの修行をして行ったから、元気に登つとるだろう。」

「だがの、あの『西の視』の行には、肝をぶすだろうて……。」

「まあ、それもええ経験だわさ。これでみんな一人前になって帰ってくるんだ。家のばあさんも、また今年もまたいでもうらうんだと待つとるわい。」

若者組合



— 下之池行者像 —

江戸時代の男子は数え歳十五歳になると若い衆の仲間に入り、村によっては、若者は夜間若衆小屋

や大家の離れなどに泊まり込んで、先輩から一人前の村民・農民となるための知識を教えられた。当時は、祭礼はしめ村の大きな行事の遂行に若衆の力が大きく寄与し、村民の期待も大きかった。

しかし、時によると、若さゆえの脱線や村制への反抗もあったので、藩からの注意もあって、若衆組合に厳しいきまりが作られるようになり、古文書に残されている。

組合に入つて一人前の若者と認められるためには、本話の「大峯参り」などのようなつらい行事に参加することが必要で、各村ほとんどが実施しており、写真の「垢離行者像」の建つ卯坂の下之池のようなみそぎの池や、先達（指導者）の家・修行堂に祀られた行者像が残っており、大峯参りは大正のころまで残っていた。なお山岳信仰は今も御嶽参りに見ることが出来る。